



岩鼻の今昔

岩鼻とは、岩の突き出た端^{はな}の意味で、往時には広島湾に突き出た岬で、岩が海波に洗われ、奇岩^{きがん}重^{ちようじゆう}疊し松が茂生して人目を引く奇観であった。

広島城の築城の折りには、天守台や石垣の石材として、この岩鼻の細粒花崗岩が使われたという。寛政8年（1796）、我羅我羅橋にあった御茶所がこの岩鼻の南端に移された。諸大名が参勤交代の途中ここで休憩し、行列を整えて広島城下へ入った。

この岩鼻は、平成元年からの造成工事により山容があらたまり、今では高層住宅の強固な地盤となっている。

（広島市東区 二葉の里歴史の散歩道より）

法明寺

被爆当時、尾長説教所と云っていましたが、現在は法明寺と改称されています。爆心地から東北に約3500mも離れていた浄土真宗・尾長説教所は、原子爆弾の炸裂による強烈な爆風のため、屋根瓦が吹き飛び、屋根の木軸組がむき出しになるほど大きな被害を受けました。町内には、燃え盛る市内から大勢の人々が避難してきて、各地で負傷者の手当が行われました。

（浄土真宗尾長説教所・原爆被災説明板より）

三本松

文禄2年（1593）、豊臣秀吉が九州名護屋（現在の佐賀県鎮西町^{ちんぜいしやう}）からの帰途、広島城に立寄ったとき、自ら手植えた松との言い伝えがある。昔この地は古川の堆積地で松が多く散生し、歴代の城主が鷹狩場に使用した所。数ある松の中で特に夫婦松の間に小松があるため、三本松と呼ばれるようになったといわれる。

（広島市東区 二葉の里歴史の散歩道より）

聖光寺

尾長山の麓にあり、かつては瑞川寺^{ずいせんじ}と称し広島で最も古い寺の一つである。創建は明らかではないが、住職の周尊が毛利元就親子から厚くもてなされた。その縁で孫の輝元が天正17年（1589）、広島城を造るため明星院山（現在の二葉山）に登り検分した際、この寺に泊まったといわれている。その後、寺運が衰え、浅野氏の時代には国泰寺の末寺になったこともある。

昭和50年（1975）現在の中区小町にあった聖光寺と合併、寺号も聖光寺と改めた。

本堂正面の右側には古銭に擬した円中の判じ文字「吾唯足知」がある。これは釈迦の悟りの中にある「吾れ唯足りることを知る」の言葉で、今の自分はこれ以上我欲を求めてはいけないという意味である。

春には紅白の花が咲く源平桃が見事であり、その他紫陽花、アガパンサス、つつじなど訪れる人の眼をなごませしてくれる。

その他、中庭にある十六羅漢像はそれぞれの人生訓を語りかけてくる感じがし、たくさんの蛙の置物には、建て蛙・着蛙・置き蛙・やり蛙・見蛙・書き蛙などがあり、ひととき、日常の雑事を忘れさせてくれる。

（広島市東区 二葉の里歴史の散歩道より）